

## 12

進行・再発胃癌に対する5-FU持続投与、  
leucovorin静注とCDDP分割連日投与法の検討

(八王子・消化器外科) 伊藤一成 山本啓一郎  
勝又健次 大野正臣 柴田和成 山下晋矢  
森脇良太  
(外科学第三) 小柳泰久

(目的) 胃癌の化学療法に対する奏効率は依然充分な結果を得ていない。われわれはCDDPの5-FUに対するbiochemical modulatorと副作用の軽減を期待し、進行・再発胃癌9症例に対し、CDDPの少量分割投与法を行い、奏効率、副作用を検討した。

(対象) 東京医科大学八王子医療センターにて1993年10月より1994年12月までに経験した進行、再発胃癌9例で75歳以下で他の癌治療を受けたことがなく、重篤な合併症を有さない症例を対象とした。

(方法) 5-FU500mg/bodyを持続、leucovorin(以下LV)20mg/bodyを静注で連日5日間、CDDP20mg/bodyを連日点滴静注を3日間投与し、2週間休業する方法で治療を行った。効果判定は胃癌取扱い規約の判定基準にもとずき行い、手術を行った症例は効果持続期間を問わず判定した。効果判定の補助診断として治療前後のDNA ploidy patternを測定した。

(結果) 奏効率はCRはなく、PR5例、NC3例、PD1例で奏効率55.6%だった。隣浸潤1例、隣浸潤疑い1例、隣浸潤疑いと傍大動脈リンパ節転移1例、傍大動脈リンパ節転移1例、食道浸潤1例の5例に手術を行った。DNA ploidy patternは4例に測定し、Aneuploidyの2例の効果判定はPR、Diploidyの2例はNCだった。副作用の主なものはい内炎、悪心などの消化器症状を6例に認め、血液では白血球減少を3例、血小板減少は2例でいずれもgrade2までで重篤なものはなかった。

(結語) CDDP少量投与法は奏効率が高く、副作用が軽度で有効な治療法と考えられ、DNA ploidy patternの測定は化学療法を行ううえで有効であることが推測された。しかし今後も高い奏効率が得られるか、生存期間の延長があるかなどを今後の課題としたい。

## 13

抗癌剤耐性・難治性婦人科悪性腫瘍に対するリンパ球養子免疫療法を用いた試み

(産科婦人科学教室)

〇武市 信 鈴木康伸 足立 匡  
高山雅臣

現在婦人科悪性腫瘍において、シスプラチンを主体とする多剤併用療法を用いることにより、その治療成績を向上を図っている。しかし、進行症例や腫瘍細胞が抗癌剤に対し耐性を獲得するに至ったものに関しては、ほとんど有効な治療を得ることは不可能である。そこで今回我々はもう一つの手段である免疫療法に着目して、これを用いて(単独もしくは、化学療法併用)、抗癌剤耐性婦人科悪性腫瘍の克服を試みた。【症例】今回我々は、子宮頸癌2例・子宮肉腫2例の計4例に対し、下記の4法により養子免疫単独、また化学療法、放射線療法を組み合わせ治療を施行した。

【方法】担癌患者よりリンパ球を採取。採取方法としては以下の4法より症例に合わせて選択する。  
①アフレーションにより末梢リンパ球を採取。  
②手術時、腫瘍細胞より腫瘍浸潤リンパ球を採取。  
③手術時腫瘍の所属リンパ節よりリンパ球を採取。  
④摘出腫瘍細胞に1万radの放射線を照射し、それを患者に皮下注し、その一か月後①の方法を用いてリンパ球を採取。つぎに採取リンパ球をCD3コーティングフラスコに500IU/mlのIL-2添加培地を用いて約7日間培養し、続いて培養液2液が含まれているバッグへ細胞を移し更に約7~10日間培養する。この間LAK活性・NK活性を測定し、最大の活性値を示したところで、IL-2とともに患者に点滴静注をする。【結果】今回経験した症例は計4例で、結果としてPR1例、CR3例であった。著効を示した症例は子宮肉腫の症例で、術後5年経過した後、昨年(平成6年)肺転移を来し来院。リンパ球免疫療法を施行した結果、転移巣の消失を胸部レントゲン写真またCTにて骨盤内腫瘍の消失を認めた。抗癌剤耐性腫瘍に対し、我々の施行したリンパ球養子免疫療法は有効であると思われる。